

天龍寺妙智院所藏・伝豊坊撰「城西聯句序」訳注と解説

山 岐 岳

訳注

【翻刻】

夫脩道洪業而遺芳範後者，固難。勵志勉企而弗忝先業者，尤難。遺於前而墜於後，雖盛弗傳也。繼其業而無所存，雖美弗彰也。

日本禪師諱良，字策彥，怡齋，其別號也。吾聞公言已之門派，肇自徑山無準範，傳無學元，^(五)元傳高峰日，^(六)日傳夢窓石，^(七)石傳默翁誠，誠傳太岳崇，^(八)崇傳竺雲連，^(九)連傳心翁安，^(一〇)安傳至公。淵源所自，皆詩文大家也。猗歟，盛哉。公承其後，殘膏賸馥，沾溉必多。故居城西妙智院，會良友，結詩盟，聯韻九千句，編成一帙，以存後貼，正以善繼先師之業也。使公無著作垂世，徒事問學，而以不克丕承爲懼，則公善繼之志，將闔而不彰，鬱而不發，滾滾澎湃之流，若有壅

塞弗決，而歷傳不顯之譽，未能愈遠而彌存也。

吾又聞，默翁之禪餘吟，全愚道人抄東坡詩并抄西漢書，竺雲之瓶梅聯句，并盛講漢書之學，心翁旁披儒學，登天台山，習三大部。至於公之城西聯句，前後相繼，而咸有遺文，昭示於後，斯故蔓延垂業之益盛耳。譬猶木焉，本根雖固而枝葉漸茂，則其敷榮鬱鬱也。至於干霄而蔽日，沛然誰能禦之。有易道焉，地中生木，以時而升。山上有木，其進以漸。惟公弗墜先業，而相繼以成其盛，此其所以爲尤難也。

或曰，生於前而問學無所資染，則其垂業也難。生於後而問學有所依附，則其繼業也易。雖然，軻氏謂，待文王而興者，凡民也。若夫豪傑之士，雖無文王猶興。惟在人立志之篤與弗篤耳。志苟弗篤，則雖賢人君子相與群導其前，尤不可入乎道也。志向或篤，則雖落落無隣，煢煢孑立，亦克

成其德矣。何在乎其有所依附哉。是故學莫先於立志也。志

確則道精，道精則言實，詩雖弗工，而理自足也。若夫玩心

於章句之末，而自謂吾學已足，甚者至棄百事而不求諸心

曰吾能詩也。是道未足而強言也。強言以遺後觀，祇見其賤

陋而已矣。況望其能篤承前烈哉。

吾今觀公之詩，言近而指遠，詞約而思深。寫難狀之景

如在目前，含不盡之意見於言外，誠理蘊於心而嘉言孔彰，

炳炳琅琅焜耀於後世者也。豈非厲志勉企而弗忝先業者哉。

時嘉靖己亥孟冬月吉

大明國前進士浙江解元東鄞南禺外史豐存叔書

註

- (一) 夫…牧田本は「天」に誤る。
(二) 脩…牧田本は「修」に作る。
(三) 恭…牧田本は「恭」に誤る。
(四) 策…原文は「策」に作る。
(五) 元…原文は「々」に作る。
(六) 日…原文は「々」に作る。
(七) 石…原文は「々」に作る。
(八) 誠…原文は「々」に作る。
(九) 太…牧田本は「大」に作る。
(一〇) 崇…原文は「々」に作る。

(一一) 連…原文は「々」に作る。

(一二) 安…原文は「々」に作る。

(一三) 韻…牧田本は「韵」に作る。

(一四) 眇…牧田本は「眇」に誤る。

(一五) 滾滾…牧田本は「瀼瀼」に誤る。

(一六) 之…牧田本は「之」を缺く。

(一七) 披…牧田本は「搜」に誤る。

(一八) 落…原文は「々」に作る。

(一九) 禧…原文は「々」に作る。

(二〇) 道精…原文は「々々」に作る。

(二一) 祇…牧田本は「祇」に作る。

(二二) 炳…原文は「々」に作る。

(二三) 琅…原文は「々」に作る。

(二四) 厲…牧田本は「勵」に作る。

(二五) 時…原文は「暁」に作る。

【訓読】

夫れ、道を脩め業を洪いにして芳せを遺し後に範たる者、固より難く、志を励き勉め企みて先業を忝めざる者、尤も難し。前より遺ざるも後に墜しめば、盛んなると雖も伝わらず、其の業を繼ぐとも存す所無くんば、美しと雖も彰れざるなり。

日本^{にほん}の禪師^{ぜんじ}、諱は良、字は策彦^{いさき}、怡齋^{いぜい}は其の別号なり。吾れ、公が己の門派^{もんば}を^い言うを聞くに、徑山^{きみやま}の無準範^{むじゅんはん}より肇^はまり、無学^{むがく}元に伝え、元より高峰^{こうほう}日に伝え、日より夢窓^{むそう}石に伝え、石より默翁^{もくおう}誠に伝え、誠より太岳^{たいがく}崇に伝え、崇より竺雲^{じくうん}連に伝え、連より心翁^{しんくわ}安に伝え、安より伝えて公に至る。淵源の自る所、みな詩文の大家なり。猗歟、盛んなるかな。公は其の後を承け、殘膏^{ざんご}臘馥^{らひふく}、沾溉^{せんがい}必ず多し。故に城西の妙智院に居し、良友を会し、詩盟^{しめい}を結び、韻を聯^{じゆがく}ぬること九千句、編みて一帙^{いっしゆ}を成し、以つて後貼に存す。正しく以つて善く先師の業を繼ぐものなり。公をして著作の世に垂るる無く、徒然に問学を事とし、而して丕承する克わざるを以つて懼れと爲ざしめば、則ち公の善繼の志は、將に闇くして彰れず、鬱りて發せざらんとす。滾々澎湃^{うごく}なが流れは、壅塞^{おさへ}して決せざる有る若く、而して歴伝不顯^{ふけん}の譽

れは、未だ愈よ遠くして弥よ存すること能わざるなり。吾れ又聞く、默翁の『禪餘吟』を。全愚道人の『東坡詩』を抄し、並びに『西漢書』を抄せる。竺雲の『瓶梅聯句』、並びに盛んに『漢書』の学を講ぜる。心翁の旁らに儒学を披き、天台山に登り、三大部を習える。公の『城西聯句』に至るまで、前後相繼ぎ、而して咸遺文ありて後に昭暉す。斯かる故に蔓延して業を垂ること益々盛んなるのみ。譬えば猶お木のごとし。本の根は固しと雖も、枝葉は漸く茂く、則ち其の敷榮鬱鬱^{ふくふく}するや、霄を干して日を蔽うに至り、沛然、誰か能く之れを禦がん。『有易』は道えり。『地中^{じちゆう}に木^木を生じ、時を以つて升る。山上に木あり、其の進むに漸を以つてす』と。惟だ公は先業を墜^{おち}としめず、而して相繼いで以つて其の盛んなるを成せるは、此れ其の以つて尤も難しと爲る所なり。

或るひと曰く、前に生るるとも問学に資染する所無くんば、則ち其の業を垂るるや難し。後に生るるとも問学に依附する所有らば、則ち其の業を繼ぐや易し。然りと雖も、輒氏^{こけい}謂えらく、「文王を待ちて興る者、凡民なり。夫れ豪傑の士の若きは、文王無しと雖も猶お興る」と。惟れ人の立志の篤きと篤からざるとに在るのみ。志苟くも篤から

すんば、則ち賢人君子相与に其の前を群導すると雖も、道無隣にして、莘莘子立すると雖も、また克く其の徳を為す。何んぞ其の依附する所有るに在らんや。是の故に、學は立志に先んずる莫きなり。⁽⁴⁰⁾ 志確かにらば、則ち道は精らかなり。道精らかならば、則ち言は実なり。詩は工みならずと雖も、理は自から足るなり。夫れ章句の末に玩心し、而して自ら吾が学は已に足ると謂うが若き、甚しき者、百事を棄てて詣を心に求めず、吾れ詩を能くするなりと曰うに至るや、是れ道未だ足りずして言を強うるなり。言を強いて以つて後觀に遺すは、祇だ其の賤陋を見わすのみなり。況んや其の能く前烈を篤承するを望まんや。

吾れ今公の詩を觀るに、近きを言いて遠きを指し、詞は約にして思いは深し。状し難きの景を写すこと目前に在るが如く、含みて尽くざざるの意は言外に見わる。誠に理は心に蘊えられて嘉言孔いに彰れ、炳炳琅琅と後世に焜耀する者なり。豈に志を励き勉め企みて先業を忝めざる者に非ずや。

時は嘉靖己亥孟冬月吉

大明國前進士、浙江解元、東鄧南禺外史、豐存叔書す。

(2) 淳業・大きなしごと。ここでは新たな法統を起すことをいう。『漢書』卷六・武帝本紀に「可以章先帝之淳業休德」とあるのをはじめ、史書の用例の多くが王朝始祖による建国の偉業、およびそれに統く皇統を称することをふまえたもの。

(3) 遺芳範後者・『文選』卷三六・傅亮「為宋公修楚元王墓教」に「楚元王積仁基德、啓藩斯境。素風道業、作範後昆。本支之祚、實隆懿宗。遺芳餘烈、奮乎百世。」とある。あるいはこれをふまえたものか。

(4) 勉企・つとめのぞむ。『文苑英華』卷四五三・制書六「授高承恭振武軍節度使制」に、「羌戎稽額、種落歸心、行之非難、勉企前哲」とあり、先人の遺徳を敬慕表述することをいう。六朝以前には用例がみえず、唐宋以降の熟語と思われる。『說文解字』によると、「企」とはもと踵を上げて爪立つことで、そこから「のぞみみる」「あおざみる」「こいねがう」「くわだてる」などの意が派生した。

(5) 弗忝先業・「忝」は、はずかしめる。『爾雅』釋言に「忝、辱也。」とある。『尚書』商書・太甲上に「嗣王戒哉。祇爾厥辟、辟不辟、忝厥祖」とあることから、直接にはこれをふまえたものか。

(6) 墜・おちる。おとす。うしなう。『廣雅・釋詁』:「墜、失也。」

(7) 雖盛不傳:これに続く「雖美不彰」の句とあわせて、韓愈「與于襄陽書」の「莫爲之前、雖美而不彰、莫爲之後、雖盛而不傳」の句をふまえたものであろう。一世の名士には、必ずこれを引き立てる先達とこれを引き継ぐ後進がいることをいう。

(8) 雖美不彰:前掲注(7)と同じく、韓愈「與于襄陽書」を

ふまえたもの。また、これに先立ち、沈約「辨聖論」に「若不表示聖功、制禮作樂、則太平之基不著、二聖之美不彰。」とある。もしも周公が礼樂を作らなければ、文王・武王の聖徳は後世に伝えられなかつただろう、との意。韓愈の句はこれをふまえたものか。

(9) 怡齋・初渡の時点での策彦の別号。再渡時には謙齋と改めていたことが、豊坊撰「謙齋記」に見える。(牧田二〇一六)

第一部・十二・雜錄(二)謙齋記)

(10) 径山:通例「きんざん」と唐音で読む。浙江省杭州市西北にある山名。ここでは唐代に国一禪師・道欽によつて山中に開かれた径山寺こと能仁興聖万寿禪寺を指す。大慧宗杲・

無準師範・虛堂智愚・密雲円悟らが住持し、日本の臨済宗・黃檗宗の法系に連なる諸僧を輩出した。(禪學一九八五)「きんざん」「まんじゅじ」

(11) 無準範・無準師範(一一七七一一二四九)。臨済宗楊岐派破

菴派。劍州梓潼県(現四川省綿陽市)の人。俗姓は雍氏。九歳で出家し、蘇州の西華秀峰寺の破菴祖先のもとで印可

を受け、その法を嗣ぐ。定慧寺・雪竇寺・阿育王寺等を経て、

徑山万寿寺の住持につき、理宗から仏鑑禪師の号を受ける。于襄陽書」の「莫爲之前、雖美而不彰、莫爲之後、雖盛而不傳」の句をふまえたものであろう。一世の名士には、必ずこれを引き立てる先達とこれを引き継ぐ後進がいることをいう。

(12) 無學元・無學祖元(一一三六一一二八六)。臨済宗楊岐派破

菴派。南宋・元の慶元府鄞県(現寧波)の人。俗姓は許氏。径山の無準師範に印可を受けて嗣法。無準の死後は靈隱寺・阿育王寺等で修行した。元の南宋侵攻にあたり浙東の諸寺を転々とするが、北条時宗の招きに応じて来日し、建長寺の住持を務め、その後時宗によつて円覺寺の開山に迎えられた。死後、仏光国師、ついで円滿常照国師の謚号を受けた。

(13) 高峰日・高峰顯日(一一二四一一一三一六)。臨済宗仏光派。

字は密道。後嵯峨天皇の皇子に生まれたが、東福寺の円爾のもとで出家し、鎌倉建長寺で兀庵普寧に隨侍、來朝した無学祖元に印可を受けてその法統を嗣いだ。その後は那須の雲巖寺に帰住したが、やがて再び乞われて鎌倉の淨妙寺・淨智寺・建長寺の住持を歴任した。法嗣に太平妙準・天岸慧廣らがあり、夢窓疎石もその一人。死後、仏国禪師、ついで仏國應供広濟國師と謚された。(玉村二〇〇三)「こうほうけんにち」

(14) 夢窓石・夢窓疎石(一一七五一一三五一)。臨済宗夢窓派。

俗姓は佐々木氏。鎌倉末から室町初期にかけて活躍し、禅林の組織化を進めた政僧として著名。伊勢の生まれだが、

幼少期に甲斐に移住して出家し、奈良東大寺で受戒。京都

建仁寺で無隱円範・鎌倉建長寺で「一山一寧に師事したのち、

高峰顕日についてその印可を受け、法嗣と認められた。そ

の後、後醍醐天皇と北条高時の要請により南禅寺に住し、

建武新政期には後醍醐天皇によって京都嵯峨の臨川寺開山

に迎えられ、天皇の死後は足利尊氏の天龍寺建立にともな

いその開山を務めた。この間、甲斐の恵林寺、阿波の補陀寺、

洛西の西芳寺など数々の寺の開山に関与し、また尊氏・

直義兄弟に勧めて、南北朝内乱の戦没者を弔うため全国に

安国寺利生塔を創設した。このほか、天龍寺の造営費を得

るための遣元貿易船、いわゆる天龍寺船を組織するなど、

政治的にも手腕を發揮した。生存中に三つ、死後に四つの

国師号を受けたことから七朝帝師と呼ばれ、門弟は一万三

千に及んだともいう。その法嗣は、無極志玄・春屋妙葩・

龍湫周沢・義堂周信・絶海中津・黙翁妙誠など、枚挙に暇

がない。和歌・作庭の才でも知られ、天龍寺・西芳寺の庭

園はその代表的な作例とされる。(〔玉村二〇〇三〕「むそくそせき」)

黙翁誠・黙翁妙誠(一一三一—一三八四)。臨済宗夢窓派。

肥前の人。俗姓は源氏。夢窓疎石に師事し、その首座を務

めた。光嚴・光明上皇の招きにより伏見大光明寺に住持し、

やがて細川頼之の請を承けて阿波の補陀寺に移つた。その

後、京都臨川寺に住し、晩年に嵯峨に華藏院を開いた。現

在の妙智院は華藏院の故地に所在する。法嗣に大岳周崇ら。

(15)

(〔玉村二〇〇三〕「もくおうみょうかい」)

太岳崇・大岳周崇(一一三四五—一四二三)。別号は全愚道人。

臨済宗夢窓派。阿波の人。俗姓は一宮氏。阿波補陀寺に住

務めたが、その後、足利義満によって相国寺鹿苑院に招かれ、

絶海中津の後を継いで僧録に任せられた。義満の死後は、

義持の篤い帰依を受け、天龍寺に統いて南禅寺の住持を務

めた。法嗣に竺雲等連ら。絶海中津・義堂周信・瑞溪周鳳・

惟肖得巖ら、当時の漢詩文の名手たちと交わり、とくに『漢

書』に精通したとされる。(〔玉村二〇〇三〕「だいがくしゅうすう」)

(16)

(〔玉村二〇〇三〕「じくうんとうれん」)

竺雲連・竺雲等連(一一二八三—一四七一)。別号に自彊・小

朶子・重良叟など。臨済宗夢窓派。遠江の人。俗姓は井伊氏。

天龍寺で修行し、万寿寺・相国寺・南禅寺等の住持を経て、

相国寺鹿苑院の僧録に任じた。享徳二年(一四五三)、現在

の宝嚴院の地に妙智院を開創し寿塔とした。瑞溪周鳳・希

世靈彥らと交遊し、門生には法嗣の心翁等安のほか、桃源

瑞仙らがいる。(〔玉村二〇〇三〕「じくうんとうれん」)

(17)

(〔玉村二〇〇三〕「じくうんとうれん」)

心翁安・心翁等安(一五二三)。出身は不詳。竺雲等連

の法嗣として、臨川寺・天龍寺の住持を務めた。晩年には

妙智院の塔主として余生を送った。策彥は九歳で心翁のも

とで出家得度し、その法を嗣いだ。(〔玉村二〇〇三〕「しんのうとうあん」)

- (19) 残膏臘馥、沾溉必多矣。残膏臘馥は、脂や香りの残つてあまつたものの意。沾溉は潤し満たす意。転じて先人の遺徳が後人を裨益すること。『新唐書』卷二〇一・杜甫列伝の、「殘膏臘馥、沾丐後人多矣」を踏まえた句。
- (20) 城西妙智院・城西とは「宮城の西」の意。妙智院は嵯峨天龍寺の塔頭の一。竺雲等連が堺商人の外護を得て寿塔として開創したもので、もとは曹源池南方の龜山の麓に位置した。策彦周良は大永三年（一五二二）、弱冠二歳にして師の心翁を失い、以後不在期間も含めて死去するまで同院の第三世住持を務めた。天龍寺塔頭のうち最大を誇つたが、幕末の禁門の変に際して焼けし、その後現在地に移転した。策彦の日記をはじめとする各種の遺品はここに所蔵され、現在は京都国立博物館に寄託されている。（牧田二〇一六）
- (21) 第二部「策彦入明記の系譜」
- (22) 善繼先師之業・『中庸』の次の句を踏まえたものであろう。「子曰、武王、周公其達孝矣乎。夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也。」
- (23) 善繼之志・前掲注（21）の『中庸』の句「善繼人之志」をふまえたもの。
- (24) 閣而不彰、鬱而不發・『莊子』天下篇に「天下大亂、賢聖不明、道德不一、天下多得一察焉以自好。……是故内聖外王之道、闇而不明、鬱而不發、天下之人各為其所欲焉以自為方。」とあるのをふまえた句か。
- (25) 不顯・「不」は大いに、「顯」は光り輝くこと。『尚書』太甲上に「伊尹乃言曰、先王昧爽不顯、坐以待旦」とある。また、前掲注（22）に掲げた同書「君牙」の用例では、文王の輝かしい徳を「不顯」と讀え、それを繼いだ武王の「不承」と対をなすものとする。
- (26) 禪吟餘・默翁妙誠の詩集。現在は伝わらない。（玉村二〇一〇三）「もくおうみようかい」
- (27) 全愚道人・大岳周崇の別号。（玉村二〇一〇三）「だいがくしゆうすう」
- (28) 抄東坡詩・大岳周崇は蘇東坡の詩の注釈をまとめて『翰苑遺芳』に著した。本書は伝わらないが、笑雲清三『四河入海』に多く引用される。（玉村二〇一〇三）「だいがくしゆうすう」
- (29) 抄西漢書・大岳周崇に『西漢書抄』なる著作があつたとい哉、文王謨。不承哉、武王烈。啓佑我後人、咸以正罔缺。』
- (30) 瓶梅聯句・竺雲等連の聯句集。現存しない。（玉村二〇一〇三）「じくうんとうれん」
- (31) 盛講漢書之學・竺雲等連は、師の大岳周崇の『漢書』研究を繼承し、その学識を讀えられて「連漢書」あるいは「漢

書連」と称された。日本で最初に漢書に標点を加えたのは竺雲であつたともいう。(玉村二〇〇三)「じくうんとうれん」

(32) 登天台山、習三大部・天台山は比叡山を指すか。三大部とは天台三大部、あるいは法華三大部といい、『妙法蓮華經』

に対する智顥による注釈書。『法華玄義』『法華文句』『摩訶止觀』の三部を指し、同じく智顥撰の『金光明經玄義』ほか「五小部」に対しての呼称。心翁の生平は不明な点が多く、比叡山で学んだとのことだが、目下不詳。

(33) 譬猶木焉..続いて示される易の卦に符節を合わせたもの。あるいは、五行思想において木徳は東方に配されることから、海東扶桑の学統を木にたとえたものか。

(34) 干霄而蔽日・『旧唐書』卷一五三・劉迺傳に、「彼干霄蔽日、誠巨樹也、當求尺寸之材、必後於椽杙。」とある。原典は周公・孔子を巨樹に例えたもの。

(35) 沛然誰能禦之・孟子・『梁惠王上』に、殺人を好まない為政者に天下の民心が帰ることを説き、「誠如是也、民歸之由水之就下、沛然誰能禦之。」といふ。また、歐陽脩「答呉充秀才書」に、相手の文章を褒めて「非夫辭意雄、雰然有不可禦之勢、何以至此。」と社交辞令を述べる。ここでは前者の字句をとるが、意味するところは後者に近い。

(36) 有易・『易』を指す。「有」は語調を整える助字。

(37) 地中生木、以時而升・『易』の「升」卦の象に、「地中生木、升。君子以順德、積小以高大。」という。六十四卦の「升」が、

下は木を意味する「巽」、上は地を意味する「坤」からなることを説く。地中に生じた木が少しづつ成長することから、ものごとの上昇を意味する吉卦とされる。継承すべき先師

(38) 山上有木、其進以漸・『易』の「漸」卦の象に、「山上有木、漸。君子以賢德、善風俗。」といふ。六十四卦の「漸」が、下は

山を意味する「艮」、上は木を意味する「巽」からなることを説く。山上に生えた木は、山の高みに拠りつつ漸次に高くなることから、ものごとの漸進を意味する吉卦とされる。先業を継承してさらなる宗門の發展をもたらすことをいうものか。(今井二〇〇二)一〇四六頁)

(39) 待文王而興者、凡民也。若夫豪傑之士、雖無文王猶興。・『孟子』「盡心上」の句。

(40) 学莫先於立志・『論語集註』述而篇の朱註に「蓋學莫先於立志、志道則心存於正而不他、據德則道得於心而不失。」とある。

(41) 若夫玩心於章句之末、而自謂吾學已足・歐陽脩「答呉充秀才書」に、「蓋文之為言、難工而可喜、易悅而自足。世之學者往往溺之、一有工焉、則曰、吾學足矣。」とあるのをふまえたもの。

(42) 該者至棄百事而不求諸心、曰吾能詩也・歐陽脩「答呉充秀才書」に、「該者至棄百事不關於心、曰、吾文士也、職於文而已。」とある。原典は、天下の正道を心に懸けず、詞章の末業に惑溺することを批判する文脈で語られる。

(43) 是道未足而強言也・歐陽脩「答呉充秀才書」に、「若子雲、

仲淹、方勉焉以模言語、此道未足而強言者也」とある。揚雄の『揚子法言』、王通の『文中子』など『論語』を模した後世の諸書を揶揄したもの。

(44) 寫難狀之景、如在目前、含不盡之意、見於言外。歐陽脩『六詩話』に、梅堯臣が語つたこととして、以下の説が見える。「聖俞常語予曰、詩家雖率意、而造語亦難、若意新語工、得前人所未道者、斯為善也。必能狀難寫之景、如在目前、含不盡之意、見於言外、然後為至矣。」またこの説は南宋以降、胡仔『漁隱叢話』後集卷二二や魏慶之『詩人玉屑』卷六などの「詩話」類に、「詩之工者、寫難狀之景、如在目前、含不盡之意、見於言外。」として引用され、広く人口に膾炙したもののがようである。

(45) 嘉言孔彰・「孔」は大いに。『尚書』『商書・伊訓』に、「嗚呼嗣王、祇厥身念哉、聖謨洋洋、嘉言孔彰。」とある。成湯を繼いだ太甲に対し、相の伊尹が、先王の思慮は広博で、その旨意が明白であつたことを説いた言葉とされる。

(46) 炳炳琅琅、焜耀於後世者也。真德秀『大學衍義』卷四に、「曰、虞帝勅天之歌、大禹朽索之訓、成湯宮刑之制、雖非有意於爲文、而炳炳琅琅、垂耀千古。」先王の法言は、文辞の末節に意を用いなくとも千古不滅の輝きを放つ、と讃える。

(47) 時嘉靖己亥孟冬月吉。嘉靖一八年（一五三九）旧暦十月。「吉」は吉日の意。

(48) 大明國前進士浙江解元東鄞南禹外史豐存叔書。豊坊は嘉靖二年に進士に及第して吏部主事の官に就いたが、まもなく

浮躁浅陋のかどで地方官に落とされ、その後致仕して野にあつた。『明実錄』には、前年の六月に、嘉靖帝の実父を上帝に配祀するため、明堂の建設を建議し、また当年六月には、瑞雲をことほぐ詩章を献じたことが記されている。『明世祖實錄』卷二一三・二三二）礼官としての再起をはかつたものと考えられるが、その父で元翰林学士の豊熙は、いわゆる大礼の議にあって嘉靖帝の意向に抗議し、廷杖を受けた辺衛に配されたものであつたことから、帝意におもねるかのような豊坊の挙措は大不孝として当世士大夫の唾棄するところとなり、結局、再仕官も実現せずに終わった。『南禺』は『山海經』の南禺山。東南の果てにあり、そこから流れ出る佐水なる川は東南に流れて海に注ぐという。『山海經』「南山經・南次三經」外史は在野の隠士の意。自身を世俗の名利を顧みない方外の士に見立てた自称。

【和訳】

そもそも、大道を体得して偉業を打ち立て、芳名を残して後世の模範となることはもとより難しいものだが、志を研ぎすまして先達を勉め仰ぎみ、その業績をしつかりと繼承するのは、とりわけ難しいことだ。前代から託されたものを後進が堕落させるなら、いくら盛んなものでも伝わってはいかないし、先人の偉業を受けついだとしても、後代に受け渡していくことができなければ、どんなにすばらしいものも人の知るところとはならない。

日本の禅僧、諱は良といい、字は策彦という。怡齋はその別号である。公が自身の門派について語るのを聞くところでは、徑山の無準師範によつて始められ、無学祖元に伝えられ、祖元から高峰顯日に伝えられ、顯日から夢窓疎石に伝えられ、疎石から默翁妙誠に伝えられ、妙誠から大岳周崇に伝えられ、周崇から竺雲等連に伝えられ、等連から心翁等安に伝えられ、等安から伝えられて公に至つたといふ。その学問の源流は、みなこれら詩文の大家である。いやや、たいしたものだ。公はその後を継ぎ、その遺惠餘沢によつてさぞかし裨益されたことだろう。ゆえに、城西の妙智院に住し、良友を集めて詩盟を結び、九千句の韻を

つらねて一書にまとめ、後進の賞覧に供したのである。まさしく先師の偉業をよく受け継いだものであつた。もし公が著作を世に残すことなく、ただただ自身の勉学のみにうちこみ、先人の踏襲ばかりを心に懸けるようであつたなら、その全き祖述を願う公の志は、暗くかげつて輝きを得られず、内にこもつたまま発揮されることなく、豊かで勢いがあつたはずの学問の水流は堰きとめられて滞つてしまい、歴世の輝かしい文名も、さらなる後の世にまで伝えられることはなかつただろう。

私はさらに聞いている。默翁の『禪餘吟』を。全愚道人が『東坡詩』を抄し、また『西漢書』を抄したことを。竺雲の『瓶梅聯句』を、そして竺雲が盛んに『漢書』の学を講じたことを。心翁が仏道のかたわら儒書をひもとき、天台山に登つて三大部を習得したことを。公の『城西聯句』に至るまで、前代から後代に繼承されつつ、みなその遺文が残つていて後世に餘光を発している。それゆえに、生い茂る学業はますます盛んとなつたのである。これを持たとえるならば木に似ている。根本は固いが、枝葉は次第に茂り、その鬱蒼とした茂みは、ついに天をつき、太陽を覆わんばかりだ。豪雨が降り注ぐような勢いは、誰が妨げることが

できよう。『周易』にいう。「地中に木を生じ、時をもつて升る。」「山上に木あり、其の進むに漸をもつてす」と。ただ公は、先人の偉業をおとしめることがなく、これを継承して盛觀をなしている。これこそがとりわけ難いことなのである。

ある者は言う。先に生れたとしても学問において感化を及ぼす弟子がいなければ、その業績を後世に残すことは難しい。後に生れたとしても学問において付き従うべき師があれば、その業績を継承することは易しい、と。そうはいながら、孟子は、「文王を待ちて興るは、凡民なり。それ豪傑の士の若きは、文王なしといえどもなお興る」と言つた。これはただ、その人が立てる志が誠実であるかどうかが問題なのだ。志がもし誠実でないなら、賢人君子がそろつてその前を導いたとしても、なおも道を体得することはできない。志の向かうところがもし誠実ならば、落魄して知己もなく、たつた一人の孤独の身であつたとしても、またその徳を成就することができる。どうしてその付き従う師によつたものか。これゆえ、学問において、志を立てるのに先んじるものはない。志が確かなならば、道にはくもりがない。道にくもりなければ、言葉は眞実となる。詩は

巧みでなくとも、理は自づから満ち足りる。章句の末節をもてあそび、それで自分で学問が十分だなどとうぬぼれ者、甚しくは、すべての世事を放擲して心に懸けないまま、自分は詩の名人だなどとうそぶいているような者は、道を得てもいないので無理やりうそぶいているだけなのだ。無理をして発した言葉は、後世から見るならば、ただその浅はかさを露呈するだけだ。ましてや先人の偉業を受けて継ぐことなど、どうして望めようか。

私が今、公の詩を見るところ、言うところは身近ながら意味するところは高遠で、言葉は簡潔だがその思念は深大である。名状しがたい風景を表すことと眼前に見るかのようで、内に秘めて言い出さない思いが言外にあらわれている。まことに、理が心に満ち足りることで美しい言葉がはなひらき、あかあかと、またさえざえと、後世に輝けるものである。いかにも、志を研ぎすまして先達を勉め仰ぎみ、その遺業をしつかりと継承した者にほかなるまいぞ。

時は嘉靖己亥年の孟冬十月吉日。

大明國の前の進士で浙江の解元である、東鄧の南禺外史こと豊存叔が書した。

解説

伝豊坊撰「城西聯句序」は、京都天龍寺妙智院三世・策彦周良の編による漢詩聯句集『城西聯句』に寄せられた序文である。原本は、妙智院に伝わる文書群「策彦入明記録及送行書画類十四種」所収の『城西聯句』稿本の巻頭に綴じられている。同文書群は現在、京都国立博物館に寄託され、當時一般に公開されている状態はないが、東京大学資料編纂所が二〇〇八年七月に写真撮影を行い、同所で写真帳の閲覧が可能となっている。

策彦は天文八年（一五三九）、明の嘉靖一八年に、『城西聯句』の稿本を携えて遣明副使として中国に渡航し、逗留先の寧波で南禺外史・豊存叔こと文人・豊坊の手になると、いうこの序を入手した。その後、一年あまりを費やして北京への使節行を全うし、天文一〇年（一五四一）に寧波から帰帆している。このような経緯から、通常、当該序文は豊坊の撰と見なされるが、後述するように、筆者はこの通説に疑義を呈するものである。

『城西聯句』は、策彦周良と天龍寺一八六世・江心承董を中心には、都合三〇名あまりの禪僧たちによって詠まれた漢詩聯句集である。題目は中唐の文人・韓愈と孟郊の『城

南聯句』になぞらえたもので、「城西」とは平安京の西郊・嵯峨の地に座する天龍寺および妙智院をいう。五言の聯句一〇〇句を一巻とする九〇巻より成り、合計文字数は九〇〇〇字を超えることから、別名『九千句』とも称された。弘次二年（一五五七）、相国寺九〇世・惟高妙安による跋を附して禁裏に上呈され、その後、江戸初期に至るまで写本・古活字本・整版本など、数多くの版本が世上に流布し、儒家禪林の作詩の手本とされた。現在でも、景徐周麟・寿春妙永らの『湯山聯句』や、後陽成院のもとで編まれた『鳳城聯句集』などとともに、聯句という文芸ジャンルにおける典範の一つと見なされる。^②

聯句とは、五言なら五言、七言なら七言の漢文詩句を複数人が脚韻を踏みながら共作するもので、もとは中国に発する詩賦の一種式である。漢の武帝に仮託された「柏梁台聯句」がその淵源とされ、東晉以後、主に東晉・宋・齊・梁といった南朝の文紳たちの作例を経て、中唐に至つて俄然一代の盛行をみた。わざわざ複数人で一首の詩を合作する聯句は、一種の高尚な言葉遊びであり、作品の創作が目的というよりは、詩句応酬の過程そのものに社交的遊戯としての楽しみがあつたものであろう。大半の作品は世に残

ることなく、一座の文会の興の趣くまま作られては散佚する運命にあつたが、韓愈と孟郊、あるいは劉禹錫や白居易といった中唐の有名詩人たちの聯句は、そのうちの精華として今まで伝わっている。一首の詩を共作することは一つの詩境を共有することだが、これらの詩人たちは聯句を通じて一會の宴に永遠の命を与えたものといえよう。^③

一方、日本における漢詩聯句も、もとは一首の詩の合作を旨とするものだつたが、中世後期に至つて当時の文芸界を風靡席巻した連歌の影響を受け、また、「和漢聯句」と称する連歌との異種混交が盛行したこともある。いわば漢詩を装つた連歌、あるいは連歌を範とする漢詩へと転生を果たした。それらは、二句一聯で一定の韻を踏む対句が直接前後する句に対しとりのような連鎖関係をもちながら延々と連なるもので、連歌と同じく首尾一貫してうたわれる主題は存在しない。その道を体得した玄人なら難解な詩句の連なりに何らかの詩的情趣を読み取ることができるのかもしぬないが、筆者のような門外の小僧には、連歌の一環一環からは感じ取れるような短詩としての完結性は見出せず、断片的で無内容な対句の羅列としか感じられないのは、いかにも残念である。^④

そもそも漢詩聯句は禪林という漢文修行に専従する特殊な社会で嗜まれたもので、多年にわたる漢詩文の研鑽が要求される、選ばれた者のための文芸であった。中世には五山を中心に、これを介して集う僧俗の文人サークルがある程度の広がりをもつていたと思しいが、五山の凋落とともに急速に衰え、江戸時代には死に絶える運命をたどつた。経史の故事の博搜を競い、古詩の本歌取りを本領とするその表現技法は、漢詩製作の基礎的教養を欠いた現代人からすれば本場中国の詩賦以上に晦渺を極め、今日では、作詩については言わずもがな、これを文学作品として賞玩しうる人もほとんどいらないであろう。また、その研究に特化したごく少数の専門家にあっても、個々の作品の審美的解釈にさして踏みこもうとしないのは、あるいは漢詩聯句なる文芸ジャンルが、現代人が「文学」に求める何ものかを根本的なところで欠いていることによるものではないか。『城西聯句』が著されたころ、策彦周良のような禪僧たちにとつてこの種の営為こそが一生の本懐であつたことを考えれば痛惜にたえないが、もとより義堂周信のごとき前時代の学僧には、黄に白をあて月に風を接ぐ形骸化した対句の応酬から、当今青衿の酒席のすさび、笑うべしと蔑まれた詩風

であつた。これも諸行無常の法縁と諦観するほかあるまい。ともあれ、文芸としては絶滅種にほかなりないが、いくつかの作品は日本文化史の邊隅に蒼然たる化石として残された。それらが中世禪林の精神生活を温める上で、貴重な手がかりであることに異論はないだろう。^⑤

策彦周良は室町末期の禪林を代表する詩僧に数えられる人物である。細川京兆家の家老ともいう井上宗信の三男として京都に生まれ、数え年九歳にして鹿苑寺に住した心翁等安の門下に参じ、一八歳で剃髪して具足戒を授けられた。師の心翁が天龍寺七七世の法灯を継ぎ、兼ねて妙智院に入住したことから、その死後、策彦は法嗣として妙智院三世住持を務めた。生涯に二度、国使の重職をになつて明に渡るという稀有な経歴を持ち、その間にしたためた日記や将来するところの書画は、中世対外通交史上の最重要資料に数えられる。つとに牧田諦亮がそれらの資料を翻刻し、体系的な整理分析を加えて大作『策彦入明記の研究』上下巻を公刊しているが、近年、これに続く新たな研究が相続いで発表されたことで、策彦の生涯、およびその遣明使節行については、さまざまなる事実が明らかになつてきた。^⑥

在世時には、漢詩文の達人として名声をほしいままにし

た策彦だが、現在ではもっぱら遣明使節行の記録者としてのみ注目され、その詩文が文学作品として鑑賞される機会はほとんどない。ただし、『城西聯句』が今日でも中世文学史上で折にふれて言及されるのは、ほぼ唯一の例外であろう。そうした意味でも、策彦の詩僧としての本領は聯句にあるというが大方の通念と見られる。策彦は、少年時代から儒釈の典籍をよく詣んじ、師の心翁もこれを天賦の才とたたえてかわいがつた。勤行のあいまには漢籍の書写朗誦に努め、『論語』『孝經』、杜甫・蘇東坡・黃山谷の詩文集はあらかた暗誦し、『毛詩鄭箋』『春秋左伝』『古文眞宝』『莊子』『孟子』などについても多少は手をつけたと自ら述べていることから、徒弟時代から並々ならぬ情熱をそれら外典の学習に注いでいたことがわかる。師の心翁の死後も、詩会に参じ、聯句にいそしみ、寸暇を惜しんで萤雪の功を積むうち年紀不惑に迫るに至つたというから、本場中国の白面書生ながらの刻苦勉励のさまである。『城西聯句』はその詩才と学識の集大成であり、これに中國隨一の文人から序文を寄せてもらうことは、かねてよりその心願であった。そこに、序を請うべき當代一流の文人と白羽の矢が立てられたのが、豊坊という人物である。

豊坊は宋代以来の名家の出身で、曾祖父の代から寧波鄞県に居を構え、明正徳一四年（一五一九）の浙江会試ではみごと解元の座を射とめた英才であった。現在でも書道の世界では、祝允明・文徵明・董其昌などと並んで、明一代を代表する書家の一人と見なされている。万巻楼なる私蔵書庫に集められた豊氏累代の秘本珍籍を縦横に涉獵する生得の特権に恵まれた豊坊は、古文字に対する学識において同時代に比肩する者なく、その筆先は古今の名蹟の筆法を真贋判じがたきまでに模倣し、さらにはそれらの美点を兼備集成するものであつたもとという。しかし、朝に上つては礼部主事に除せられながら素行不良をもつて微官に謫され、野に下つては復官を望むあまりに父の遺志を顧みず上意におもねる不幸者と譏られたりと、同時代の士大夫による評価は決して芳しいものではなかつた。平生の対人関係においてもトラブルが絶えず、非凡な天稟を惜しむことなく他人の書画の偽作に注ぎ込むなど、その行跡には常軌を逸したところがあつた。経典の訓詁についても卓抜な理解を示す一方、自身の創見を古文に仮託して、箕子朝鮮本やら徐福日本本やらを偽作して世に広めたことは、实事求是を旨とする清代儒者たちの痛罵と嘲笑的となつた。晩年

にいたつて癲狂ますます甚だしく、書淫墨癖に家財を蕩尽して困窮のうちに仏寺で余生を送つたという。

策彦がこの豊坊に自身の『城西聯句』への序文執筆を所望したのは、豊坊こそが当今天下第一の文人と、どこかで聞きつけてのことであつた。おそらくは寧波上陸以後、日本使節の周辺に出入りする文人たちから仕入れた情報だったのだろう。このころの豊坊は、まだ致仕してまもなく、官界への返り咲きを企てていたころで、浙江解元という格別の栄誉を帶び、閑居の身とはいえ進士の肩書は失つておらず、その学識と筆墨の才において、寧波の文人社会に冠絶する存在であつた。策彦にとって、自身の半生にわたる研鑽の集大成である『城西聯句』への序文を乞うにまたとない人物と仰ぎみられたに違いない。

しかし、せっかく策彦が満を持して持参した大作も、そもそも日本式の連歌にあたる文芸ジャンルが存在しなかつた中国の文人たちの鑑賞眼には、平仄と押韻は備わるもの、これといった内容も感興もない、断片的な叙景句の長大かつ平板な羅列としか映らなかつたのではないか。策彦が豊坊に『城西聯句』の序文を執筆してもらうため、在野の文人・柯雨窓に仲介を依頼してその稿本を手渡したのは、

嘉靖一八年（一五三九）十月五日のことであつた。ところが、それから数日をおかずして、詩冊は策彦の手に返却された。柯雨窓の書信によれば、豊坊は懇求に屈して十月十二日までにこれを仕上げることに同意したものというが、その執筆にあたつては、肝心の稿本はもはや必要ではなかつた。つまり、こうしたことは当時さほど珍しくなかつたものだろうが、序文の撰者は、おそらくこの詩集をまともに読んでいないのである。漢詩聯句は、その芸術上の特性を体得し、それに応じた審美眼をもつた者でなくしては、それを読むことの愉悦は享受しえないのである。豊坊も、また柯雨窓も、おそらく稿本を一瞥すれば、それが中唐の韓孟聯句へのオマージュを装いつつも、もはや中華文人の審美的範疇に位置づけられる代物ではないことは、即座に見て取れたのである^⑧。

しかし、策彦がこうした扱いに落胆した形跡は、少なくともその日記から読み取ることはできない。朝貢の旅程に上る以前に、目当ての序文が果たして無事落手に及ぶや否や、そちらの方がはるかに重大な関心事であつたかに見えれる。ともあれ、約束どおり十二日には、策彦は柯雨窓から件の序を受け取つた。その日のうちに書面で丁重な礼を述べた策彦は、二日後には大満足で北京への旅程に上つてい

る。策彦にとって、この序を得たことは、初次の使節行にともなう私事としては最大の成果の一つであつた。自身の作品が本当の意味で唐土文人の賛嘆を勝ち取つたわけではないことはうすうす察したに違いない。しかし、この序を入手することには、それ自体大きな意味があつた。つまり、日本国内ではすでに相当の名声を確立した策彦が、本場中國の一流の文人からも、漢詩名人というお墨付きを得たのである。また、帰国時ではなく、北京に北上する前にこれを欲したのも、おそらく北行の途上、そして在京文人との交際にあたつて、この浙江解元の贊辞が、策彦の文才を保証する紹介状のような役割を果たすことが期待されたものであろう。その後、江戸時代に至つてもたびたび出版された『城西聯句』の諸本は、いざれも豊坊の名を掲げたこの序を巻頭に置き、策彦の使節行に言及する史書は、豊坊に序文を書かせた事実を一大成果と書き立てた。大唐中華の著名文人の手になるこの序は、策彦とその同時代人の語り草のみならず、後世に耀く永代の勲章となつたのである^⑨。

さて、本文の内容だが、前半では、策彦の法統が径山万寿寺の無準師範に発することを述べ、默翁妙誠以下の先師

たちの文学的業績に言及しながら、策彦の『城西聯句』を

その全き繼承のあらわれと讃える。寧波でも無準師範の名は広く知られていたようだが、無学祖元以下の情報は、文中にいうように策彦自身が提供したものにほかならない。先師の遺業を継ぎ、後世に範を垂れることについて、『尚書』ほか、『中庸』『莊子』『孟子』『易經』などの古典の語句を用いた文飾が施される。豊坊は、それ 자체が偽書として知られる自撰の『古書世学』において、『古文尚書』とそれ附された孔安国の伝を偽作と断じて憚らないが、ここで同書の篇章に基づく語句が散見されるのは、その宗旨に悖るようにも思われる。後半では、たとえ文王がおらずとも豪傑はやはり起つものだとする孟子の言葉が引用され、そもそも学問において欠かせないのは、先師の教えや筆先の功夫よりも、道を得ようとする当人の意志であると明言する。ここでようやく策彦の詩を「言は近くして指は遠く、詞は約にして思ひは深し」と讃え、「炳炳琅琅として後世に焜耀する者」と褒めそやすが、今日一般に室町後期の禅僧たちが、禪宗草創期の真摯朴実な求道精神を失い、唐土文人のまねごとをして筆墨の末技を競つたとの悪評を被つてることを考えると、策彦に向けられた形ばかりの賛辞

は何とも皮肉に響く。^⑩

繰り返すが、この序文の撰者は肝心の聯句の方はほとんど読み込んでいないので、ここでの賛辞は、通り一遍の美麗句を駆使した社交辞令を出るものではない。撰者の悲憤慷慨を吐露したがごとき、「甚だしきは、百事を棄ててこれを心に求めず、吾れ詩を能くするなり、と曰うに至る。是れ道にまだ足りずして言を強うるなり」のくだりは、歐陽脩からの借り物で、曲がりなりにも俗事を閑却して忘我無心の至境を志す禪僧にあてた言葉としては場違いの感を否めない。また、撰者の評語の核心をなすかに見える「状し難きの景を写すこと、目前に在るが如し。含みて尽くさざるの意、言外に見わる。」とは、梅堯臣の発話に帰せられる常套句で、南宋以降、「詩話」と総称される各種の詩評書を通じて人口に膾炙していたことから、ここでの流用はややもすると通俗の臭みすら感じさせる。同じく豊坊が策彦にあてたとされる「謙齋記」の自由闊達、天衣無縫な叙事と比べると、古典の引用ばかりで内容空疎な彫虫小技と言つても的外れではなかろう。少なくとも、一世に狂誕をうたわれた鬼才・豊坊の本領をこの中に見て取ることはできないのである。

この序が豊坊の撰と見なされる根拠となるのは、文末の「南禺外史豊存叔」という記名、そして前述の策彦の日記中に見える執筆依頼の記録である。しかし、策彦はこのとき実際に豊坊と面会したわけではなく、友人の柯雨窓を仲介役として、これを依頼し、現物を入手したのである。通常、この状況ならば、序文の執筆者の真偽に疑いが差し挟まれる余地はないであろう。しかし、この柯雨窓が、しばしば他人の書蹟の偽作をこととする贋作の達人であつたとなれば、話は別である。

そもそも豊坊自身が稀代の能書家で、古文字学に造詣の深い学究であると同時に、その学識を駆使しての古典籍偽造の大家であつたことは、前述のとおりである。また、豊坊の門人で、やはり策彦と交友関係にあつた方梅厓なる人物は、これまで腕に覚えある筆達者で、おそらく策彦の請いを受けて『城西聯句』稿本の題字をはじめ、妙智院文書中に数々の揮毫を残している。しかし、この方梅厓は、豊坊の筆跡を偽作して懐を肥やしていたことから、豊坊本人は甚だこれを憎悪し、刺客を放つて目玉を剔ろうとしたところ、騙されて豚の目玉を受け取ったというような笑い話がまことしやかに語られていたほどである。米谷均の研究

によって、策彦が初度入明からの帰国にあたつて朝廷の高官たちから贈られたという餞別の墨蹟は、その作者のほぼすべてがすでにこの世を去つていたことが明らかになつてゐる。つまり、それらの墨蹟は死者の名において作られた贋作だつたのだが、それを帰国する策彦の手土産に持たせるため請負い役を果たしたのが、ほかならぬ柯雨窓や方梅厓であつた。¹¹

策彦が柯雨窓とのやりとりの中で最初に豊坊の名を挙げた時には、どこから聞きつけたものか、豊坊が南京にいると思つていたらしい。實際には豊坊は寧波に帰住していたようだが、ならば、直接面会を申し込んで仁義を切つてもよさそうであるにもかかわらず、『初渡集』にはそれを強く望んだ形跡は見あたらない。おそらくは文字に記されないやりとりがあつたのだろうと想像されるが、何ともいぶかしい。柯雨窓が策彦の知らぬところで豊坊の墨蹟を偽造するため、はじめから面会を諦めさせていたのか、あるいはそれを薄々感づいていた策彦が、そもそも自ら望まなかつたのか、憶測をよぶところであろう。

柯雨窓にしろ方梅厓にしろ、青史に名を刻む異才をこそ欠くものの、詩も文も一通りこなす教養を備え、かつ他人

の筆墨を巧みに模倣しうる高度な書写技術を身につけた、策彦にとつては畏敬すべき中華文人であつた。策彦が明から持ち帰つた両者親筆の詩文は、素人目に見ればたいそうな作品だといつてよからう。「城西聯句序」は楷書をやや崩した行書体で書かれており、豊坊の真蹟とされる台湾故宮の「各体書書訣」下冊の行書に見まがうばかりだが、臨書に手慣れた達意の筆であれば、このくらいの模倣は朝飯前なのではないか。一方、策彦が中国滞在中に書かせた東坡巾を被つた頂相「策彦周良図」には柯雨窓親筆の贊が附されているが、より形よく整つた楷書体ではあるものの、「城西聯句序」の筆跡とどこか似た風合いを感じさせる。^②

ちなみに、豊坊の遺文を集めた『万巻樓遺集』には、この「城西聯句序」も、また後年の策彦二度目の渡明時に贈られた「謙齋記」も載録されていない。同遺文集は、本人の死後半世紀を経た万暦四五年（一六一七）に時の地方官の後押しを受け、孫の豊建によつて刊行されたものである。豊坊は晩年に家産を食いつぶして零落し、その手稿は万巻樓に伝えられた万巻の蔵書とともに相当分が散佚したとおぼしいことから、かりに豊坊の実作だったとしても残らなかつたのかもしれない。いずれにせよ、これらが豊坊の真

蹟であるという確証を見出すことはできない。確証がないことは、そうでないということはできる。以上の状況から推測するに、これがむしろ柯雨窓か、あるいは方梅厓による偽作、もしくは豊坊の默認を経ての代作であるという可能性を決して排除すべきではないことは、一応の結論としてここで提示しておきたい。

さしあたり、このあたりまでが、現時点における筆者の探究の限界である。この序を豊坊以外の何者かの作と見なすに足る決定的な証拠は得られていない。かといって、そうした疑念は、単なる主観的な印象論ではなく、これまで挙げてきた状況証拠から、まったくの虚妄とも言ひがたいのではないか。豊坊の真筆か、それとも柯雨窓もしくは方梅厓による偽作か、最終的な結論は出ないまま稿を閉じねばならないが、これを従来どおりに「豊坊撰」と呼び捨てるこども、また穩当を欠くように思われる。標題を「伝豊坊撰」とする所以である。

註

① 史料編纂所の写真帳は、請求記号：六一七〇一六二一五一、
ファイル番号：二〇〇八一三二、原蔵者分類番号：〇二一三

三一一一四。策彦入明記録に関しては、「牧田二〇一六」第

二部「策彦入明記の系譜」ほか、「伊川二〇〇七」〔須田二〇一三〕を参照。また、策彦入明時の将来典籍については、「岡田一九五九」下巻・第四章「五山文学史上的策彦」第六節「中國書籍の輸入と中國文人と交友」には、「城西聯句序」の書影が一部ではあるが掲載されている。(一七二一・七三頁)「城西聯句」に関しては、「牧田二〇一六」第二部・「五山文学史上的策彦」第二節「聯句類について」、および第六節「中國書籍の輸入と中國文人との交友」のほか、「深沢二〇一五」第一章「城西聯句」の成り立ちと内容」を参照。その版本については、「深沢二〇一七」〔深沢二〇一八〕に詳しい。中国の聯句については、「青木一九七〇」〔能勢一九八二〕〔川合二〇〇六〕を参照。中唐の聯句については、「川合二〇〇〇」〔齋藤二〇〇七〕が鑑賞の手引きとなる。漢詩聯句の日本の發展については、「能勢一九八二」に詳しい。日本式聯句の作例をみると、「來田編一九九七」がよい。近年の作業として「楊二〇一五」以下がある。

中世日本社会における聯句の社會的位置づけについては、「朝倉一九九六」を参照。「岡本二〇一三」は、策彦の「聯句」なる作品集からその交友関係を探る。「ごく最近の動向として、渡邊樹「中世後期漢聯句資料の注釈的研究」という学振研究プロジェクトが、策彦の「聯句」を含めた日本禪林の漢詩聯句に注釈をつける作業を進めているようである。

成果に期待したい。

策彦周良の生涯とその使節行については、長らく「牧田二〇一六」が決定版としての地位を占めてきたが、近年、日

中関係史研究の盛行により、それを塗り替える學術的成果が少なからず発表されている。その先鞭をつけたのは、「伊川二〇〇七」だが、策彦を直接扱ったものではない。入明記録全般の中で策彦に言及するものとしては、「伊藤二〇一三」〔村井等編二〇一五〕〔須田二〇二二〕など。「須田二〇一三」〔須田二〇一三〕はそれぞれ「初渡集」と「再渡集」の文献学的解説。兩度入明記のテキストとしては、「初渡集」卷中〔嘉靖一八年五月二二日～同年一〇月六日〕については、「伊藤・岡本等二〇一三」、「再渡集」については、「須田編二〇一三」が、現時点で最良の翻刻を提供する。「岡本二〇一三」〔須田・岡本二〇一四・二〇一七・二〇一二・二〇一三〕〔須田・岡本二〇一三〕は、妙智院や宮内所蔵の諸記録のうち、策彦の生平やその入明使節行に関わる史料を紹介。「須田二〇一四」〔米谷二〇一五〕は、策彦の詩文が文学的な虚構を含み、すべてを史実と見なすべきでないことを指摘する。「米谷二〇一三」年は策彦入明記を活用した東アジア諸国の儀礼の比較研究。(陳二〇一一)〔朱二〇一三〕は中国の研究者による中国語の研究成果。策彦の兩度の使節行における豊坊の交流を扱った「山崎二〇一八」は、台灣中央研究院での報告をもとにした拙稿。本稿とも関わるところが大きい。

(7)

豊坊という人物を正面から扱った〔平岡 一九五二〕は、経学と文字学の両側面に切りこんだ古典的名著。〔陳斐蓉二〇一八〕は、書道史の観点から現存する豊坊の手蹟を検討したものだが、巻頭に詳細な評伝を掲げる。宋代以来の豊氏一族の家系については、〔近藤二〇一三〕に詳しい。豊坊の生平、策彦との接触、およびその日明関係史上の意義については、拙稿〔山崎二〇一八〕に筆者の所見を示したが、本稿の着想以前に発表したものであるため、執筆時の定説にしたがい「城西聯句序」を豊坊の真蹟として論じている。

(中) 嘉靖十八年十月五日、同書(下之上) 嘉靖十八年十月七日・九日・十二日に関連する記述がある。(伊藤・岡本等二〇一三)・(牧田二〇一六)。

(9)

『城西聯句』諸版本については、〔深沢 二〇一七〕〔深沢二〇一八〕。『續本朝通鑑』後奈良天皇三・天文九年条に、「是年、僧周良入明國燕京。」とあるのに続き、「良好聯句、至九千句、入明時携之、令浙江豐存叔作序。」とある。

禅林の詩風の通史的理窟については、〔玉村 一九六六〕〔蔭木一九七七〕を参照。後者の第二編第四章第六節に著される策彦への評価はことのほか手厳しい。

方梅庄は、諱を仕といい、その生平に關しては史書に若干の記述がある。〔陳二〇〇八〕を参照。〔米谷二〇一五〕は、策彦に贈られた名士たちの詩文が、寧波文人による偽作であることを明らかにした画期的論考。

(12)

柯雨窓の生平については他の文献に徴するすべがないが、その手蹟は妙智院所蔵「策彦和尚入明記録及送行書画類十四種」に含まれる〔(三) 策彦周良図〕〔(八) 送別誌〕〔(九) 衣錦榮帰図〕に付せられた詩文からうかがうことができる。筆者にはそれらの巧拙を判断する能力はないが、かりに著名文人の手になるものと偽称して流通していても見破れることはないではと思わせる見事な作品である。(牧田二〇一六)第一部・十二・雜錄・(二) 策彦禪師衣錦榮帰序「贈怡齋禪師衣錦榮歸賦」)

参考文献

- 青木正児 一九七〇:「聯句淺說」(『青木正児全集』第七卷、春秋社、一九七〇、初出・『山口大学文学会誌』一、一九五〇)
- 伊川健二二〇〇七:「戊子入明記」に描かれた遣明船(『大航海時代の東アジア－日欧交通の歴史的前提－』吉川弘文館、第二部第一章)
- 伊藤幸司 二〇一三:「入明記からみた東アジアの海域交流」(中島染章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院)
- 山崎岳・米谷均 二〇一三:「妙智院所蔵『初渡集』巻中・翻刻」(中島染章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院)
- 岡本真二〇一三:「目録からみた妙智院旧蔵策彦周良入明関係史料」(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室編『中世政治社会論叢・村井章介先生退職記念』東京

大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室)

章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院)

岡本真二〇二三・「宮内庁書陵部所蔵『聯句』にみる策彦周良の周辺」(『市史研究 ふくおか』一八)

岡本真・須田牧子二〇一四・「宮内庁書陵部所蔵『策彦和尚往来筆記』」(『東京大学史料編纂所紀要』二四)

岡本真・須田牧子二〇一七・「天龍寺妙智院所蔵『入明略記』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二七)

岡本真・須田牧子二〇二〇・「天龍寺妙智院所蔵『大明譜』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』三〇)

岡本真・須田牧子二〇二一・「天龍寺妙智院所蔵『謙齋南遊集』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』三一)

岡本真・須田牧子二〇二〇・「天龍寺妙智院所蔵『入明略記』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二七)

岡本真・須田牧子二〇二一・「天龍寺妙智院所蔵『謙齋南遊集』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』三一)

岡本真・須田牧子二〇二一・「天龍寺妙智院所蔵『入明略記』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二七)

岡本真・須田牧子二〇二一・「天龍寺妙智院所蔵『謙齋南遊集』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』三一)

須田牧子二〇一四・「杭州へのあこがれ、虚構の詩作」(東京大学史料編纂所編『日本史の森をゆく』中公新書)

須田牧子二〇二一・「遣明使節の旅」(『日本歴史』八七二)

須田牧子編二〇二三・「訛注『再渡集』(稿)」(科学研究費補助金基盤研究(C)「中世後期日明関係の人的基盤の研究—「初渡集」「再渡集」を中心に—」研究成果報告書)

須田牧子・岡本真二〇一三・「天龍寺妙智院所蔵『明國諸土送行』(『東京大学史料編纂所研究紀要』二三)

編『かがみ』四七)

深沢眞二二〇一八・『城西聯句』の諸本（下）（大東急記念文庫

編『かがみ』四八）

牧田諦亮二〇一六・『策彦入明記の研究』（『牧田諦亮著作集』卷五、

臨川書店、原版・『策彦入明記の研究（上・下）』法藏館、

一九五五・一九五九）

村井章介編集代表・伊藤幸司・須田牧子・関周一・橋本雄編二〇

一五・『日明関係史研究入門・アジアのなかの遣明船』（勉誠

出版）

山崎岳二〇一八・『攜古詩書坑焚前聖賢道化可無疑・日本貢使策

彦周良與寧波解元豐坊の文墨之交』（『亞洲海域間的信息傳

遞與相互認識』中央研究院人文社會科學研究中心）

楊昆鵬二〇一五・『鳳城聯句集』訓注稿（一）（『京都大学国文

学論叢』三四）

米谷均二〇一三・『日明・日朝間における肅拜儀礼について』（中

島榮章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院）

米谷均二〇一五・『中世日明関係における送別詩文の虚々実々――

死せる寧波文人、生ける遣明使団員をねぎらう――』（『北大

史学』五五）

〔附記〕

末筆ながら、本資料の利用をご許可くださつた妙智院ご住職島見周隆様に篤く御礼申し上げます。